



朝のこない夜はない

謙けん虚きょに反省はんせいして、
真しんの道みちを学まなびましよう

副山首 鈴木正修

最近さいきん、わが国くに最初さいしょの校歌こうかというものを知りましした。

それは、お茶ちやの水女子大学みずじよしだいがくの校歌こうか『みがかずば』です。

明治八年めいじねん、お茶ちやの水女子大学みずじよしだいがくの前身ぜんしんである東京女子師範学校とうきょうじよししはんがっこうの開校かいこうにあたり、当時とうじの皇后陛下こうこうへいかから下賜かされた御製歌ぎよせいに譜ふをつけたものが校歌こうかとなつています。



「みがかずば 玉もかがみもなにかせむ 学びの道もかくこそありけれ」
和歌ですから歌詞は短いのですが、極めて典雅で荘重な趣を持った校歌
です。

興味のある方は、お茶の水女子大学のホームページにアクセスされると
開くことができます。

ところで、皇后陛下の御製歌とほぼ同じ意味の言葉が、儒教の経典の一
つ『礼記』にあります。

「玉琢かざれば器を成さず。人学ばざれば道を知らず」

儒教は修身、修養を説く学問ですが、宋の時代に興った儒教の一派、朱
子学は古典や歴史の学習に重きを置きました。これに対して、朱子学を批
判して興った明代の陽明学は、古典学習もさることながら、それにも増し



て実践を重んじました。陽明学の有名な言葉に『事上磨練』というのがあります。

「人はすべからく事上に在って磨練し、功夫を做すべし」

「事上」とは、実際の事柄に即して、ということ、
「功夫を做す」とは、修行するとか、修養するといった意味です。

つまり、日常のあらゆる場面の中で自分を磨けということです。

王陽明は人との応対・応接、仕事の交渉、友人との会話、家族との会話、みな事上であり、自分を磨く場であると言っていますが、その中で「人に対しては常に謙虚で寛大であるべきだ」と強調しています。

「謙は、あらゆる善行の大本であり、傲はあらゆる悪行の魁なのである」
陽明の言葉です。



また次のようにも言っています。これも謙虚に通ずることです。

「学ぶとは自己反省することである。もし、やたらと人を批判したり、人の欠点ばかりが目につくと自分の欠点が見えにくくなるものである。反対に、よく自己反省していると、自分に多くの欠点があることに気づくようになり、人の欠点を責め立てているひまなどなくなるものだ。そうして人格が陶冶されていく時、周りはその人に自然に感化されていくものである」

学ぶとは自己を知り、謙虚に反省して自分の内側を真摯に見つめることから始めなければいけないようです。



朝のこない夜はない (210)